中国黒色磨研瓦の調査

目　的　黒色磨研瓦は黒色で光沢があり、北魏から隋唐時代に盛行した瓦である。北宋時代の『営造法式』にある「青棍瓦」とする見解もある。平城宮第一次大極殿に葺く瓦の色を復原するための比較研究としてこの瓦の製作技法を明らかにすることを目的とした。

調査対象と方法　中国社会科学院考古研究所の協力のもと、唐長安城大明宮出土瓦の中から表面状態の良好な黒色磨研瓦14点、比較資料として非黒色磨研の平瓦２点、鬼瓦１点、鴟尾１点、磚１点を抽出し調査した。黒色磨研瓦は軒丸瓦５点、軒平瓦４点、丸瓦２点、平瓦２点、熨斗瓦１点である。考古学的観察を主体とし、特に器表の調整に注目した。

調査成果　胎土は夾雑物がなく粒子の細かい土。焼成は堅緻。軒丸瓦と丸瓦は瓦の長辺に平行するタテ方向のミガキを凸面全面に施す。つづいて広端側、狭端側の幅２～５cmの部分にヨコ方向のミガキをかける（図51）。丸瓦は凸面側縁まで、軒丸瓦はさらに瓦当外区外縁の無文部分、瓦当側面にもおこなう。丸瓦部側面と凹面は未調整、狭端部肩から玉縁凸面にかけてはヨコナデ調整。

平瓦は凹面をタテナデ後に広端側と狭端側をヨコナデしたのち、中央部をタテミガキし、さらに広端側と丸く加工した狭端面をヨコミガキする。凸面はヨコナデ、側面は未調整。軒平瓦は広端面に重弧文と波状文を施文し、凸面広端側にもタテミガキ後ヨコミガキする。

調査の結果、屋根に葺いた状態で露出する部分にはもれなくミガキを施し、光沢を出す効果を意図したと考える。鴟尾の鰭面と磚の表面にはミガキ痕があるが、鬼瓦にミガキはみとめられなかった。道具瓦と磨研技法の関係については、今後の調査をまって判断したい。

今後の課題　軒平瓦、平瓦凹面のミガキ調整部位は濃い黒色を呈し周縁との差が顕著である。この発色の要因については今後の検討課題である。また、黒色磨研瓦の製作技法をより詳しく理解するために、胎土の成分、焼成温度や焼成方法、器表の炭素皮膜の有無やその状態を自然科学的手法よって分析する必要があろう。**（今井晃樹）**

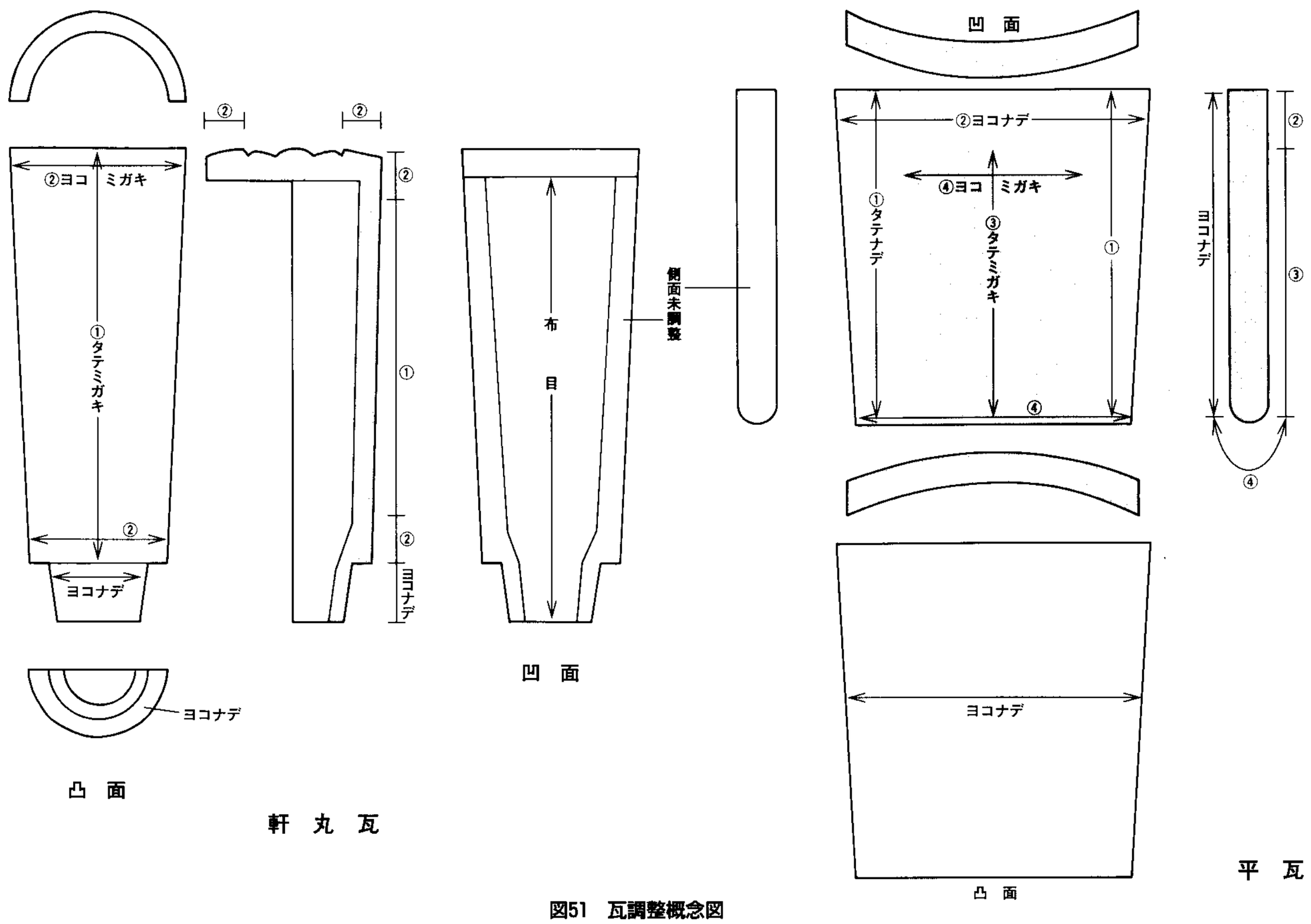

図51　瓦調整概念図